

176

こんにちは。塾長の大井です。

3期生受験戦記40回です。

1月31日。出陣式。

最後に私からのエールです。

私はずっと歴史を共にしてきた彼らを前にして、その場で感じたことをそのまま言葉にしようと考えて原稿は書かず、壇に立ちました。所詮言葉は気持ちに追いつかないだろうと思いつつも、それでも彼らの力になるよう言葉を手繰っていきました。

「いよいよな、いよいよ君たちが、舞台に上がる日がやって来た。

先生たちは、かつては1年教えたらまた次の教室って、そんな出逢いと別れを繰り返してきた。その中には、すごく慕ってくれて先生と絶対受験したいっていう5年生もたくさんいて、そんな子たちとの別れは本当に辛かった。

だから、先生はそんなんじゃなくて、出逢ってから受かるまで、生徒たちと受験を生きぬきたい。そう思ってこのTOPを創ったんだ。」

子どもたちはいつも以上に真剣にこちらを見つめていました。

「それに最初に応えてくれたのが君たちだった。

3期生の歴史はTOPの歴史そのものなんだ。

まずはU。Uが来てくれたことはこのクラスが祝福されたクラスであることの証だと思う。」

Uさんは少しはにかむように、でも嬉しそうに笑いました。

「確かにUは不器用だし、口下手だし、説明も決してうまくないけど、でもすごく素直でいつも陽気なヤツだった。

そして、TOPで本当の勉強に出逢った。そんなUのTOPでの成長が、Aとの友情につながり、Mとの絆につながっていった。

U、明日出し切れ。TOPに来るのが遅いからって出遅れたなんて思うな。出し切れれば、必ず届く。

お前が雙葉に届かないなんて、一瞬も、ほんの一瞬も思ったことない。いいな。」

そして次に、たくさんの時間と心を注いだMさんに。

「M。最初は、4,5年のうちはすばらしかった。言われたことは全部

やる、素直に聞く、結果も出す。M といえればいい形容のシンボルだった。

それでも M は、急速に失速し、ある時は卑しくもなった。」

そこで M さんの顔がぐっと引き締まりました。あの苦しかった逃避の日々が胸を去来したのかもしれませんが。

「そんな時、先生は誰がどれだけお前を甘やかしても、俺が絶対変えるって思った。どんなに誤解されようが、お前をそこから救い出す。そう信じて向き合い続けた。

そして長く逃げたけれど、俺とお前だからって言えると思う。俺とお前だから、その長いトンネルを超えた。そして何より、開成という天が、お前を眠ったままにはさせなかった。

M、開成という天はお前の上で、ピッカピカに輝いてる。もう仰ぎ見た天じゃない。あとは、自分の全部でそれをつかみきれ。」M さんは強い目で深く頷きました。

A さんはもう満面の笑顔でした。

「A。A は TOP の創始者だと思う。TOP は先生と、田宮先生と、そして君で始まった。最初 A からの問い合わせの電話が鳴った時は、

初めての生徒が来たって、舞い上がるくらい本当にうれしかった。
最初はずいぶん警戒心も猜疑心も強くて、なんだか暗いところで生きてたよな。だけど TOP での日々で、A は変わった。本当に変わった。
先生が与えたのはただのきっかけだけだ。あとは全部自分で勝ちとった。

学ぶ喜びに溢れてた。生きる喜びに溢れてた。だから、3 期生だけじゃなく、他の学年もみんな A 先輩 A 先輩って言ってる。A 先輩みたいになりたい、がんばりたいって。

受験という道を通してこんなにも頭も心も成長した。もうそれはすでに、ひとつの得難い達成だと思う。

生徒だけど A、お前のことを尊敬してる。

だからこそ・・・。」

そして、また全員を見つめました。

「だからこそ、明日勝とう。いいか、欲しいのは2つ。

自分に贈る合格証書と・・・、それはもうあると思う。感謝も歴史も絆も。でも過程だけじゃダメだ。

あとは学校から勝ちとる本物の合格証書だ。

報われるべき奴が報われる。そんな日だ、明日は。

忘れるな。先生はお前たちを最高傑作だと思ってる。

俺たちが手塩にかけて育て上げた最高傑作だ。」

言いながら、私もその言葉に打たれていました。

(そうだ、これは最高のチームだ。)

その想いが溢れて、本当に胸がいっぱいになりました。

「いいな、5人で勝って、5人で笑おう。」

「はい！！」

元気よく響き渡った声には、一つ大人の声も交じっていました。

あの夜感じた震えるような一体感を、私は生涯忘れることはないでしょう。

(次回につづく)

2018年1月22日

大井雄之